
『朱色優陽 アケイロユウヒ 』 2

想隆 泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『朱色優陽 アケイロユウヒ』 2

【Nコード】

N7102M

【作者名】

想隆 泰気

【あらすじ】

緋蔭優との出会いを経て、境守起陽は夏休みを迎えていた。

ようやく訪れた長期休校。怠惰な日々を過ごそうと画策する起陽。しかし、そんな目論見も空しく、彼は休み初日から一本の電話で叩き起こされる。

横暴な電話の主に憤りつつも、求めに応じる彼。
向かう先は学校。その中庭。

そこで彼は、小さな花壇と　小さな少女に出会う。

全校の嫌われ者であるはずの起陽に、ひまわりのような笑顔を向ける少女。

果たして、少女の真意はどこにあるのか。

そして、その小さな花壇の意味は？

戸惑いつつも、起陽は小さな花壇と少女に興味を抱いて行く

《色移ろふは花とヒト》

「1 - 1」

ガキの頃、夏休みの宿題で朝顔を育てたことがある。

真夏の暑い中、土いじりなんぞしたあげく、毎日ちまちまと水やりをするなんて、今となつては考えられないことではあるが、当時はそれなりに楽しんでいた覚えはある。鉢に立てた柶に蔓が伸びていく様は、見ているだけでわくわくしたもんだ。

とは言え、それもガキの頃の話だ。今さら園芸になど興味はないし、そんなことに割いている時間もない。

ようやく訪れた夏休み。一日中、冷房の効いた部屋でのんびんだらりと惰眠を貪りたいと言つのが人情というものだし、それこそが夏休みの有意義な過ごし方というものだろう。

……そうだ。ようやくの夏休みだった。待ちに待った夏休みだった。しかも、その初日だった。くそ真面目に早くから起きる気は無かつたし、ガラガラと太陽の照りつけるこんな炎天下の真昼に、外出する気などさらさら無かつたのだ。

なのに、何故、俺はこんな場所にいるのか。

学校である。昨日までとは違い、人気のない校舎には静寂な空気だけが流れている。いつもは鬱陶しい教師達の姿も、今日は疎ら。

当然だ。夏休みの学校にいる人間など、当番の教師か、クラブ活動に精を出す、青春真っ盛りな、それこそ炎の妖精の加護を得たような、暑っ苦しい連中くらいのもんだろう。

……忌々しい。そんな連中さえこの世に存在しなければ、俺がこんな場所に呼びつけられることも無かつたと言つのに。

今日のお昼、時間ありますか？

そんな電話で叩き起こされた。ほんの数時間前のことだ。

電話の主は誰かって？

ひなたじゃあない。あいつだったら、

そのまま受話器叩きつけて、今頃は夢の中だ。

つまり、そうはできない相手だったのだ。

では、正午に学校の中庭へ。良いですか？

柔らかく、丁寧ながら、有無を言わせぬ迫力をも含んだ物言い。

そして、俺が無碍にはできないような相手である。

この二つの条件に当てはまる人間なんて、一人しか存在しない。

香月センセこと、かつぎ香月 梗子きょうこ女史に他ならなかった。

中庭の片隅に、園芸部が管理している花壇があります。

今日一日、園芸部員のお手伝いをお願いします。

あくまでも園芸部顧問としての『お願い』ですから、断つても構いませんけれどね？

まあ断るのなら、改めて朝日奈さんをお願いしますけれどね？

矢継ぎ早に紡がれる、耳障りの良い流暢な言葉。

それはとても丁寧で、どこまでも優しい響きだったので 断れ

るわけが、なかった。

情けないと思うが、あのヒトとひなたに挟撃されたら、堪ったものではない。あの二人を前にすると、この世で最も恐ろしいものが、実は暴力などではないのだと言うことを思い知らされる。

……まったく、俺には女難の相でも出ているのだろうか。厄介な女ばかりに付きまとわれているような気がする。

……まあ、なんだ。一番厄介な女と知り合ってしまったのが、ついこの間のことなのだが。

「……………」

この三人に組まれたら、それこそ堪らないな、何てことを思いながら、俺は嘆息した。

それにしても、いつたいつになったら、園芸部員とやらはやってくるのか。指定の時間は過ぎているのだが、一向に誰かがやってくる気配がしない。

眼の前には、一般的な家庭菜園程度の小さな花壇が、ひっそりと在るだけだ。

……しかし、本当に小さい。園芸部で管理しているなんて言うから、もう少し立派なものかと思ったが、まるで個人所有のもののように、こぢんまりとしている。と言うか、煉瓦で枠を組んだだけのその佇まいは、みすばらしくさえある。

でも、前に見た時も、こんな感じではあったか。

「……………」

ふいに湧いた感慨に、小首を傾げた。……俺は、何を考えていた？だが、その時だ。

「待たせたなっ！ 境守さかがみっ！」

背後から、ふいに声をかけられた。

「！ っと、園芸部の奴か って……あ？」

はっとして振り返るが、そこには誰の姿もない。

しかし、声は確かにすぐ背後から聞こえた。近くにいるはずなのだ。

「……どこだ？ 姿が見えん」
きよろきよろと辺りを見回す俺。

と、

「こっ、こらっ！ どこを見ているかつ、下だ、下っ！」
そんな声に従って、ゆるりと視線を下らせれば

「……あんたが、園芸部員？」

問うと、そいつは残念な胸を得意げに張って、

「うむっ、いかにもだっ」

えっへん、と。

……………。

ペットと飼い主は似る、何てことをよく言うが、花壇も世話をする人間に似るのだろうか。

炎天下の午後。

横暴な教師に呼び出されて来てみれば。

そこに待っていたのは、こぢんまりとした小さな花壇と シロツメクサの花のように、小さくて、けれど凜とした強さを持った、一人の少女だった。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「1 - 2」

恐らくは、150センチあるかないかだと思われる。何せ、俺の視界に入らなかったのだ。けして背が高い方ではない、ひなたや神山とて、そんなことはない。明らかに、平均を大きく下回る上背である。

おまけに、薄手の夏服ですらほとんど押し上げることのない、残念な胸元。これまた、けして恵まれているとは言えない前述の二人よりも、さらにしょんぼりである。

控えめに言って、ちんちくりんの幼児体型だと言えよう。

正直にそう言ったら、眉間に手刀を叩き込まれたわけだが。

誰がマニア受けのツルペタ少女かつ！

いやそんなことは言っていないのだが、なんて俺の言葉も聞かず、そいつは特徴的な八重歯を覗かせながら、しつけの悪い犬っころみために『がるる』なんて唸っていた。

彼女の名は、大杉^{おおすぎ} 逢花^{おつか}と言った。

信じられない話だが、その制服に付いたリボンの色を見るに、上級生だった。小学生だと言われても疑わないのだが、年上なのである。嘘のようなホントの話だ。

ともかく、その逢花とやらが件の園芸部員であると言う以上、俺はそいつを手伝ってやらねばならなかったわけだが……さて。俺の助けなんぞ本当に必要だったのかどうか、甚だ疑わしかった。顔を合わせてからおよそ小一時間。俺のしたことと言えば、近くの水飲み場から散水用のホースを引っ張ってきたことくらいで、後

はずっと少し離れた木陰で、花の世話をする麦わら帽姿の小さな少女を眺めていただけだ。

……今も、それは変わらない。俺は変わらず木陰でぼーっと逢花を眺め、逢花は額に汗しながら、せかせかと花の世話をしている。

外野からただ眺めるだけの俺と、花の世話に一人没頭する逢花。

俺達の時間は、大きな隔たりの中であって、けして交わることはない。

……俺とあいつの間には、実際の距離よりも広く、そして深い溝があるように感じられた。

当然だ。あんなに一生懸命になって花の世話をするような女が、俺なんかと関わって良いはずがないんだ。……俺は、境守起陽は、命を育むなんてスウコウな行いとは、対極に位置する存在なのだから。

だが。

そろそろ、午後1時を30分は過ぎようかと言う頃だ。

ふと何かを思い出したように立ち上がった逢花は、近くの陽影に置いてあった手荷物の中から大きなレジャーシートを取り出して、その上に何やら荷物を広げ始めた。

俺は怪訝な思いでそれを眺めていたが、間もなく彼女は満面の笑みで振り返って、俺を手招きして見せた。

「？ ……何だ？」

無意識に呟きを漏らしつつも、俺の足は彼女の元へ向かっていた。……けして、何かを期待していたわけではなかったのだが。

逢花の元に辿り着くと、眼の前には不思議な光景が広がっていた。

「……昼飯、か？」

思わず、間拔けな言葉が漏れた。

だが、逢花は特に何も思わなかったのか、至極当然と頷いて、

「うむっ、お昼ご飯だ！ わたしのお手製だぞ、喜ぶが良いっ！」
そう言って、口の端に八重歯を覗かせながら、子供のように屈託なく笑った。

眼の前には、小さくとも色取り取りの花が咲く花畑と、そしてそのすぐ側に、これまたファンシーな花柄が目立つランチセット。

……何なんだ、このむず痒いような感覚は。

「……言葉遣いのわりに、少女趣味なんだな」

「んなっ……!？」

ぽつりと漏らした俺の呟きに、逢花は瞬間、顔を真っ赤にした。

「ちちちちっ、違うぞっ！ こっ、これはあくまで母上の趣味であってだなっ、本来ならわたし自身を忌避すべきモノなのだっ！
なのだがっ！ 今日はちよつと致し方なくというかなっ！ 二人分のお弁当など詰めたことなどないわけでっ、当然ぴったりのお弁当箱など持っているわけもなくっ！ 母上に相談したらこんなことに、だなっ……!」

上擦った早口で捲し立てる言葉は、ほとんどよく分からなかったが、

「あ？ 二人分？」

それだけが耳に残った。

「二人って……誰と誰よ？」

問うと、逢花は耳まで真っ赤にして叫んだ。

「~~~~っ！ ええいっ！ 皆まで言わせるな意地の悪い奴めっ！ ぐだぐだ言つとらんどつとと座れっ！ 座らんかっ！」
剣幕に押されてレジャーシートに腰を下ろすと、逢花はようやく落ち着いて、言った。

「……まったく……この状況で二人と言ったら、わたしとお前しかいないだろうがっ……」

つまり、眼の前のこれは、俺のために用意されたものだと言

うことだった。

……正直、自分の身に何が起きているのかよく分からない。

突然、横暴な女教師からの電話で叩き起こされたかと思ったら、園芸部の手伝いをやらされることになった。と思ったら、大した作業もしていないのに、そこそこの手の込んだ手製弁当など、ご馳走になっている。

香月センセは、いったい何がしたかったのか。何をさせたかったのか。

逢花は、何をさせたかったのか。……俺なんかと、何がしたかったのか。

……分からないことばかり。

結局、この日俺に分かったのは、小さな花壇に咲いた花々の美しさ。それを眺めながら頂く、逢花の手製弁当の旨さだけ。

それだけだった。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「1 - 3」

果実の形を模した容器の氷菓子と言うのは実は色々あるらしく、以前、何気なく立ち寄ったコンビニでオレンジシャーベットを見つけた。

別に高いモノでもないし、軽い気持ちで買って行ったら、あのヒトは大層喜んだ。それはもう、見ているこっちが恥ずかしくなるぐらいのはしゃぎようだった。

それからと言うものの、いつの間にか、商店のアイスクースを見かける度に、何かないかと探してみるのが日課になっていた。あのヒトが喜びそうなものを手土産にするのが、日課になっていた。

で。園芸部の手伝いという名の昼食会を済ませた後、今日も今日とて、冷たい手土産を携えて、俺はそのヒト　　優ゆうさんの病室へとやってきたわけだが。

「……一つ聞いてもいいか？」

「んー？　なーにー？」

いつもの脳天気声で答える優さん。

俺は一つ嘆息してから、問うた。

「何で、このヒトがここにいる？」

俺の指差す先には、パイプ椅子に腰掛ける、見舞客らしき美女が一人。

……俺は、そのヒトをよく知っているわけだが。

「こら、そう不躰にヒトを指差すものではないですよ、境守君？」
そう言って、珍しくいたずらっ子のような笑みを覗かせるそのヒト。

その笑みが何だか腹立たしくて、俺は殊更指を突きつけて、言っ

てやった。

「っ……んじゃあ直接聞くぞ！ 何だつてあんたが、こんなところにんだっ 香月センセエよっ!？」

優さんの傍らで微笑むそのヒトは、香月梗子女史に他ならなかった。

「なんでつて、お友達だからだよ？」

答えたのは、優さんだった。

「はあ!？ 聞いてねえぞ、んなこと!」

「うん。言つてないもん」

激昂する俺に、さらつと言つてのける優さん。

「何だよ!？」

俺のガツコが香月センセの勤め先だなんてのは、俺やひなたの制服を見れば一目瞭然のはず。気づいていれば、一言在ってしかるべきではないか。

つまり、気づいていて言わなかったのか？

「え？ だって」

しれつとして、優さんは言った。

「その方が、面白いじゃない」

……………。

「……ちょっと、その、すいません。少し、壁とお友達にならせて下さい。」

「はいそこー、壁とお友達になつてないで、ヒトと話す時はちゃんとこっち向きなさい。香月せんせーにそう教わつてないのー？」

背を向けて、壁に頭を預ける俺に、原因を作った当人は無慈悲な言葉を浴びせてくる。

香月センセはセンセで、

「まあ、そのレベルの教育は初等教育ですからね。私の担当ではありませんけど」

なんて、のほんと笑っているし。

何だか頭痛がしてきたが、このままこうしてても話が進まないのは事実だった。

意を決して振り返ると、並んでこっちを見る二人の美女が眼に映る。

普通の男であつたなら、すわ美の女神の共演かと思わせかねない取り合わせだが、俺にとっては地獄の女帝の狂宴である。

「……あんたらそーやって、当人の与り知らぬところで俺を笑い物にしてやがったのか」

恨めしそうに言つてやると、さすがの優さんも少しだけ焦つたような声を上げた。

「ええっ？　笑い物になんかしてないよお、たつくんが如何に良い子か、如何に可愛い子かつて話しかけてないもんっ」

「もつと嫌だわぼけえっ！」

「えゝん、たつくんが怒鳴つたあゝ」

なんて、思わず怒声を上げた俺に、優さんは見え透いた泣き真似などしつつ、傍らの香月センセに身を寄せる。

「はいはい、大丈夫だから泣かないの、ゆうちゃんは強い子でしょ」と、幼い子供をあやすように優さんの頭を撫でてやるセンセ。

……そんな二人を見ていると、まあ確かに、いい友達なんだろうなあ、なんて思う。

まあ、取り敢えず。二人のことはこれからゆっくり聞かせて貰うとして、だ。

……聞くまでもなく、一つ、無視できない現実が確定してしまつたわけだ。

優さん、香月センセ　そして、ひなた。図らずも今日、この死のトライアングルが形成されてしまった　むしろ、俺の知らないところではとっくに完成していたのだ、境守起陽包囲網が。

……この先のことを考えるだけで、頭が痛くなってくる。

だから嫌だったんだ。しがらみ背負って生きるってのは。

【つつく】

《色移ろふは花とヒト》

「1 - 4」

世の中には信じられないことと言うのが往々にしてあるもので、例えば、小学生みたいな体躯をした女が実は年上であつたりとか。

しかし、彼女に聞かされた昔話は、それよりも余程空想めいた話だつたので、

「……やつぱ嘘だろ？」

そんな疑問が、いつまで経っても俺の中から消えることはなかった。

「嘘じゃありませんよ」

困つたように、彼女　香月センセは苦笑した。

「いやでもよ、俄には信じがたいぜ　あんたと優さんが、学生時代ライバルだつた……なんて、さ」

優さんの病室で、一頻り昔話を聞かされた後、朱色の夕陽が照らす帰り道。俺と香月センセは肩を並べて歩いていた。

思い返されるのは、先ほどまで聞いていた昔話だ。

香月センセと優さんが知り合つたのは、丁度俺らくらいの年の頃。香月センセは今に輪をかけた堅物で、一方の優さんは、今と変わらずとぼけた笑顔を皆に振りまいて、いつも皆の笑顔の中心に居るようなヒトだつた。

勉強しか能の無かつた香月センセは、どちらかというところから孤立しがちな女生徒だつたが、優さんはその気安さと言う名の図々しさで、瞬く間に香月センセを自分のテリトリー　『緋蔭優時空』

に取り込んでしまった。

それから言うもの、二人はいつしか親友と呼べる関係になつていったわけだが　そこまではいい。そこまでなら、別に疑うべき

要素はなかった。

信じられなかったのは、あの優さんが、あのとばけた女が、この香月梗子女史がライバル視するほどの　才女であった、と言う事実。……いや、事実だとは到底思えないのだが。

「言っちゃ何だが、俺、あのヒトに知的な部分なんて感じたこと無いぜ?」

「酷い言いようですね」

苦笑しながら、センスは言う。

「彼女が才媛であったのは間違いありませんよ。だって、私、文系以外の教科であの子に勝ったことなんてないですし、総合ではいつも負けていました。それに、地味な一生徒でしかなかった私と違って、彼女は生徒会長なんて言う肩書きまで持っていましたからね」

「……まあ、人望はありそうだけだな」

それだけは分かる気がする。実際、病院でも彼女は人気者なのだし　俺自身、惹かれてるのは否めない。

複雑そうに眉を寄せる俺が愉快だったのか、センスはふと、くすりと笑った。

「やっぱり敵いませんね、あの子には。私のできなかったことを、こんなにもあっさりとしてしまうのだから」

言って、眼鏡の奥の瞳を少しだけ寂しそうに揺らした。

「?　どう言う意味?」

問うと、センスは改めるように優しく微笑んで、続けた。

「昔……私や優と同じ学校に、一人の男の子がいました。学校中から不良のレッテルを貼られて、でも他の悪い子達とも連むことなくいつも孤立していた男の子。」

私は彼に何かしてあげたくて……助けてあげたくて。でも、何もできなくて。

……結局彼は、私の手の届かないところに行ってしまった。

境守君を見ていると、彼のことを思い出します。よく、似ています。外見とかではなくて　ヤマアラシみたいなところ、とか。だから、ついついキミに肩入れしてしまいます。世話を焼きたくなつてしまいます。笑わせてあげたいと……優しい顔をさせてあげたいと、思つてしまいます　……教育者、失格ですけどね、こんな私情を挟んでは」

言つて、センセは自嘲的に笑う。

「いや……そんなこた、ねえと思うけど……さ」

条件反射的に答えつつも　その実、俺は上の空だった。そんなことよりも、余程気になったことがあつたから。

「……優には敵わないです、ほんと」

そう言つて、寂しげに笑うセンセ。

俺は僅かに黙してから、尋ねた。

「……そいつのこと、好きだったの？」

我ながら、どうでもいいことを聞いたものだと思う。色恋沙汰なんて、俺に似合わないこと甚だしい。……それでも、尋ねずにはいられなかつたわけだが。

センセは何も答えなかつたが、夕陽に照らされた朱い顔が、一瞬、恋する少女のようにあどけなくはにかんだような気がした。

「……昔のことですから。……それでも、やっぱり肩入れしてしまいますけど」

しばらくして漏れたその呟きは、今までの話の続きのようであつて、その実違うような気もした。僅かに潤んだ彼女の瞳に映るのが、俺ではないような気がした。

それはただの猜疑心だったのか　或いは、子供染みた嫉妬だったのか。

何にしろ、俺にはそれ以上、彼女にかける言葉が見つからなかつた。

俺達は言葉もなく、肩を並べて歩く。堅物の女教師とひねくれ者の不良学生。変な組み合わせ。……だけど、居心地は不思議と悪くない。

そう言えば　と、一つ聞かなければならなかったことを思い出したが、しかし、俺は言葉を飲み込んだ。

俺達を空から照らす朱い夕陽も、今は黙っている、と。……そう、言っているような気がしたから。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「2 - 1」

大杉逢花の実家は、『ガーデンショップ大杉』と言う屋号を掲げる商店だった。とどのつまりが、園芸用品一般を扱う花屋である。家族経営の小さな店だったが、店構えはそれなりに手の込んだもので、女の子好きのしそうな綺麗で可愛い作りの店だった。その店先で、俺は一人の可愛い女性と向かい合っていた。ふわふわの髪に、フリルの付いたピンクのエプロン。少々、少女趣味が過ぎる嫌いはあるが、その華奢な体躯と柔和な表情、穏やかな物腰は、その女性らしい可愛らしさに良く似合っていた。

「……お姉さん？」

条件反射的に漏れたそんな呟きに、当の本人は、

「あら」

なんて嬉しそうな声を上げたが、

「……いや、認め難いのだがな　それでも、母上なのだ」

そう言って、その可愛い女性の子　大杉逢花は、軽く頭を抱えた。

さて。何故俺達がこんな状況に陥っているのかと言えば。

話は、三十分ほど前に遡る。

前日、結局ことの真意を香月センセに聞き出せなかった俺は、もやもやとしたものを抱えたまま翌日　つまり、今日の朝を迎えた。別にそこまでする意味も義理もないし、無視してしまっても良かったのだが。……気がついたら、昨日と同じように、学校へと足を向けていた。

だが、校門に差し掛かったところで、俺は帰途につく逢花と鉢合わせた。聞けば、今日は初めから、花壇の世話は午前中に済ませ、

昼食は家で取る予定だったのだそう。

それならそれで解散すれば良かったのだが。どういつつもりか、俺は強引な逢花に手を引かれ …… そうして、現在に至る。

で、だ。

「……マジでか」

眉をひそめて、確認するように問うた。

逢花は嘆息して、

「マジなのだ。……いい年をして何を考えているのかと、いつも問うているのだがな」

確かに、その意見も一理ある。俺達くらいの子が在れば、その実年齢は推し量るべくもない。ピンクのフリフリは幾ら何でもないだろう。

しかし、実際、この母親は実年齢を感じさせない。俺が開口一番で呟いた言葉はお世辞でも何でもなくて、極当たり前に、そう思ったが故。そうとしか思えなかったし、今だって、母親であると言う方が疑わしいくらいなのだ。

率直に言つて、非常に可愛らしい。そして、魅力的なヒトだ。

逢花に、よく似ている。

「はじめまして、逢花の母です。逢花ちゃんがいつもお世話になってます」

間延びした声でそう言つて、逢花の母は深々とお辞儀をする。

「え？ あ、いや、世話も何も知り合つたばかりで……」

ふいなことに、ろくな返答が思い浮かばない。

「あら、そうなんですか？ 逢花ちゃんたらすごく嬉しそうに帰ってきたから、てつきり、色々、お世話になっているものだばかり」

「い、色々？ お世話？」

「なっ、何を言っているのだ母上っ！」

妙な含みのある物言いに問い返すと、逢花は慌てたように俺達の間割って入った。

「妙なことを言わないでくれ母上！ 境守にはもう歴とした恋人がいるのだっ！ だからっ、私と境守は、母上が想像しているような関係では断じてないのだぞっ！ 境守もっ、母上の言うことに一々反応しないで宜しいっ！」

「お、おう」

ハイテンションで捲し立てる逢花に、そんな言葉しか返せない俺。

だが、慣れているのか、はたまた単にずれているのか、逢花母は違った。

「あらゝ、そうなの？ それは残念ねゝ、息子ができるのかと思つたのにゝ」

なんて。

「母上っ！」

真っ赤な顔で怒号を上げる逢花だったが、それでも逢花母は柔和に笑っているだけだった。

逢花も、そんな母に慣れているのか、それ以上噛みつくことはせず、

「っ　行くぞっ、境守！ こんなヒトの相手はしていられんっ！」
そう言つて、俺の手を引いた。

手を引かれるままに、店の奥に通される俺。背後では、「ゆっくりしていつてねゝ」なんて言う、逢花母の愉快そうな声がしていた。

店の最奥には扉が一つあって、どうやらそこから、自宅へと抜けられるようになっていたらしいかった。

だが、

「お、おい　逢花っ！」

さすがにこれ以上流される訳にも行かず、俺は前に行く逢花を引き留めた。

「どう言つつもりだよ、わざわざてめーの家まで、俺なんか連れてきて」

「? どう言つても何もないだろう? 今日まで来てくれるとは思わなかったとは言え、弁当を用意していなかったのは私の落ち度だ。なれば、この上はできたての料理を振る舞わねばなるまい。それが道理と言つものだ」

「どう言つ道理だ!??」

さらりと訳の分からないことを言つ逢花に、思わず語気が荒くなる。

だが、別に怒っている訳ではない。ただ 不可解なのだ。

俺は一度気を落ち着けて、改めた。

「……あのよ。正直、よく分からねえんだよ。いきなり香月センセに呼び出されたかと思つたら、弁当持つたちまつこいのが現れてさ。その上、今度はできたての手料理? 意味が分かんねえ。」

お前、俺のこと知らない訳じゃないんだろ? 俺は境守起陽だぞ? 全校の嫌われモンだ。お前、俺が嫌じゃないのかよ? 普通、俺なんかと一緒にいたいわけないだろ。お前 いったい、何がしたいんだよ?」

不信任を隠す気もなく吐き捨てると、

「お前のことが嫌だなどと、そんなことあるものか」

まるで真夏のひまわりのように、凜とした姿で逢花は言った。

「私は、お前を嫌だと思つたことなどこれまで一度もないし、一緒にいたくないと思つたことなどない。むしろ、その逆だ。私は、お前と一緒にいたいと思つている 想つていた。だから、今、私は、お前は、ここにいるのだ」

「

」

返す言葉が見つからない。何を言われたのかすら分からない。

ただ一つ、言えるのは。

「……じゃあ、いいのか」

そんな呟きに、逢花はこくりと頷いた。

「勿論だ。私が腕によりをかけて作る馳走、遠慮無く愉しむが良い！」

言って、出会った時と同じように、残念な胸を自信満々に張ってみせる逢花。

……正直、混乱はしていた。未だ彼女の真意は計り兼ねていたし、疑問は残る。

けれど、取り敢えず今は、小さな先輩の厚意に甘えさせて貰うことにしよう。ぐう、と鳴った腹の虫が、彼女の手料理をせがんでいたから。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「2 - 2」

表では、まだまだ眩しい昼下がりの太陽が燦々と降り注いでいる。耳に届くのは、微かな町の喧噪と蝉の声。

真昼の商店街はそれなりに賑わってはいたが、それでも常時ほどの慌ただしさはなく、ヒトにも町にも、極穏やかな時間が流れている気がした。

平和な夏休みである。学生にとっては、有意義に過ごすべき貴重な時間だ。

……その貴重な時間に、俺は花屋の店先で似合わないエプロンなど身に着けて突っ立っている。

俺はいつ、花屋でバイトなどすることにしたのでせうか？

すぐ側には、同じようにエプロンを身に付けた逢花。他には誰もいなかった。

本来の店の人間の内、逢花の父は、元より苗の買い付けとかで出かけていたし、あの母親と言えば、急な配達とかで、つい先頃、大慌てで店を出て行った。

……つまりは、それが原因なわけだが。

要するに、店番を押しつけられたわけである。……何で俺が？

だが、その疑問に答えてくれる者などここにはいない。俺の相手として今現在そこにいる幼児体型こそが、その悪魔の提案に一番乗り気であったからだ。残念なことに。その胸と同じくらい、残念なことに。

だがまあ、あのフリフリのピンクエプロンを着けさせられなかっただけましな。俺の首には、本来は逢花父の物であるジーンズ生地

のエプロンが掛かっている。

一方、少女趣味全開の方はと言えば　まあ、言わずもがな、眼の前のちまっこののが着けているわけだが。

「ええいつ！　じろじろ見るなっ！　仕事がし辛いだろうがっ！」

と、商品の手入れをしていた逢花がふいに怒号を上げた。

じろじろ見ているつもりはなかったのだが、逢花にはそう感じられたらしい　いや、まあ、なるほど。そう言うことか。

「何だ、気にしてるのか、そのピンクのフリフリ」

「当たり前だっ！」

言って、逢花は気恥ずかしそうに顔を赤くした。

「前にも言っただろう、こんなのは私の趣味ではないのだっ。こんなっ、中世で脳がトチ狂ったようなデザイン、誰が好き好んで着るものかっ……誰が見たっておかしいではないかっ、こんなものっ……」

どうして良いのか分からないくらい恥ずかしいのか、逢花は深く俯いて、エプロンの裾をきつく握りしめる。

俺は、そんな逢花を少し黙って眺めてみた。

果たしてそれは、そんなに言うほどおかしいだろうか？

逢花はけして、こういった服を着て気味が悪いような顔立ちはしていないし、小さくて華奢な体躯も、どちらかと言うとそれに似合っている。全く癖のない長く伸ばした緑髪は、一見和装の方が似合いそうではあるが、いやしかし、これはこれで趣がある。

「そこらの変態野郎に襲われてもおかしくないと思うが」「フォローしているつもりかそれはっ」

いかん。無意識に思ったことが漏れていた。逢花の瞳が恨めしそうに潤んでいる。

「うつつ……こんなことなら、店番など一人ですれば良かったっ……」

…」

涙混じりに、そんなことを漏らす逢花。

そりゃちよつと勝手過ぎやしませんかってところではあるが、まあ、取り敢えずはそんなこと、どうでもいい。

俺は嘆息して、続けた。

「……まあ、確かにな。常日頃からそればっかつてのは何だけど、似合う似合わないで言えば　逢花には、良く似合ってると思うが？」

言つと、逢花は恐る恐る、顔を上げた。

「本当……か……？」

まるで、か弱い少女のような声。……いや、実際少女ではあるんだが。

「ああ、嘘やお世辞は得意じゃねえよ、俺あ」

首を竦めて言つてやると、逢花はふいに眼を輝かせて、俺を正面から見上げてきた。

「じゃつ、じゃあつ、かつ　可愛いかつ！？」

「つ　！？」

その質問もさることながら、何かを期待する子供のように、爛々と輝く大きな瞳に気圧されて、俺は瞬間押し黙った。

だが、

「なあつ、可愛いかつ！？」

そう執拗に求めてくる童女に、間もなく折れた。

「つ……あ、ああ……か　可愛い……と、思う、ぞ……」

それを聞くと、逢花はさらに眼をきらきらと輝かせ、

「な、なら、少し眼を瞑ってくれないか！？　いやすぐ済む！　少しでいいんだつ」

落ち着き無く訴える逢花に、答えるより先に眼を閉じた。

少しして、逢花の合図で眼を開ける　と、そこには、少し意外な彼女の姿があった。

「ど、どうだろうか……？ これでも……変ではないか……？」

少しだけ怯えるように、そう尋ねる彼女。その髪に、おしゃれと呼ぶには余りにささやかな、細いリボンが一つ、結んであった。

何が変わたと言っただろう。そのくらいのこと、何を怯える必要があるのだろうか。分らなかったが、その愛らしいリボンが良く似合っているのだけは間違いなかった。

その姿があまりに、何と言っか……可憐で。正直、照れ臭くはあったのだが、

「……ああ。良く似合ってる。……可愛い、と思うぜ？」
少しだけ戯けるようにして、そう言った。

俺の言葉に逢花は嬉しそうに笑ったが、ふと恥ずかしそうに俯くと、ぼつりと言った。

「……恥ずかしついでに、聞いて貰えるか……？」

「……今更、否も応もないだろ」

苦笑混じりに言っでやると、安心したように微笑んで、逢花は言った。

「私にはな、夢があるんだ。……馬鹿げた夢だ。お前は、笑うかも知れない」

「……気にすんな。聞いてやるから」
促すと、こくりと頷いて逢花は続けた。

「私は、この世を花で一杯にしたいんだ。綺麗で、可愛くて、優しい花たちを見て、触れて……そうすることで、皆を元気にしてやりたい、笑顔にしてやりたい。そう、思っているのだ。……呆れたか？」

遠慮がちに問う逢花に、俺は首を振った。不思議と、笑う要素も呆れる要素も見つからなかったから。

「……境守には、夢はあるか？」
ふと。

……そんなこと、考えるのも馬鹿馬鹿しい。俺みたいならくでなしが、一端にヒトの夢なんて語れるわけがない。そんなこと、許されるわけもない。

だから。

「馬鹿な奴の馬鹿な夢を叶えてやること……くらいか」

今はそう、嘯いた。

……そうすることしか、できなかった。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「2 - 3」

「さて、起陽くんや。それじゃ一つ、聞かせて貰うとしましうか」

と、俺の傍らに正座して、こちらの顔を覗き込むようにするエプロン姿の女。

エプロン姿と言っても、こっちの女はあっちほど、残念な体軀をしているわけではないが。

「……どうしても聞きたいのか？ ひなたさんや」

嘆息しつつも、調子を合わせて俺は返す。長い付き合いの間に、もうすっかり慣れてしまったやりとりである。不本意ではあるが。

するとその女 朝日奈ひなたは、にっこりと無慈悲な笑みを浮かべて言った。

「ええ、もちろん。だって、起陽が夏休みのお昼前に家にいないなんて、絶対おかしいもん。起陽が自発的に早起きするなんて、絶対おかしいもん。あたしが起こしに行く前にもう起きてるところか、家にいないなんて 絶対、認められないんだから」

……アナタそれ、凄く理不尽なこと言ってますヨ？

そう言ってやりたいところだったが、言っても聞くわけないのは分かっていた。

「……分かったよ、何が聞きてーんだ」

嘆息混じりに言うと、ひなたは満足したように頷いて、言った。

「昨日今日とこの二日、昼間から外でどんなおイタをしてきたのかしら？ 怒らないから、おかーさんに話してご覧なさい」

……誰が『おかーさん』か。こんなのが母親だったら俺はグレるぞ。……いやまあ、もうグレてるけども。ヘンゼルも真っ青なくら

いグレートルけどもね。

閑話休題。

さて。しかし、どう答えたものかな。ただ事実をありのままに語っても面白くない。何より、何だか負けたような気がして腹立たしい。

しばし思案して、俺は答えた。

「……フリフリの衣装の似合う可愛い女の子と、綺麗な花畑を眺めつつランチなど」

「なっ　なんだってええええええっ!？」

よほど予想外だったのか、ひなたは壁際まで後退ってそう声を上げた。おい、誰かキバヤシ呼んで来い。

「そ、それって、まるつきりデートじゃないのっ!」

……そうなのか？　無自覚だったが。てか、言われてもぴんと来ないが。

「しかもなに!？　フリフリの衣装の似合う可愛い女の子!？　フリフリの衣装!？　フリフリって!　それはあれ!？　ゴスロリってやつですかっ!？」

いや、ゴスロリではなかったが。逢花の話では、ピンクハウスとか言っらしいぞ、あれは。……てか、ゴスロリってお前。

「起陽ってば、ロリっぽいのが好みだったのね……幼馴染み歴十五年目にして一番の衝撃だわ……」

いやいやいや、待て。それはない。どっちかって言うと、ちっちゃいより大きい方が俺は好きだ。どこが、とは言わないが。まあ言うなれば、優さんや香月センセみたいな以下略。

「でも、今日のあたしには秘密兵器があるのよ……ふっふっふと。ひなたはふいに不気味な笑いを漏らすと、何やら俺に背を向けて、傍らにあった自らの鞆の中をこそごとまさぐりだした。

口を挟まず眺めていると、やがてひなたは、

「じゃーんっ！」

なんて言いながら、振り返った。

「どーだっ！」

……どーだと言われてもな。

「何だそれは」

問うと、ひなたは何故か自信満々に胸を張って言った。

「ねこみみですっ！」

……。

確かに、アナタの頭の上に鎮座したそれは猫耳でしょうけども。

「……どしたの、それ」

「今日、やよいちゃんとお出かけして買ってきたのです！ えっへん」

だから、何故得意げなのですか。

……と言うか、その友人の名はひなたから聞いて知っている。確か、ある特殊な趣味の持ち主だ。そいつと一緒に出かけて、で、そのアイテムですか。

「……何となく、どこに行ってたのか分かったわ」

「秋葉原です！」

「言わんでいいわっ！」

……まったく。あの街にも困ったもんだ。次から次へと訳の分からん、いかかわしいもん生み出しやがって。……まあ、猫耳なんて可愛いもんだけど。

嘆息して見やると、ひなたは何かを期待するように「ん？ ん？
なんて小首を傾げたりしている。

「……言つとくが、何も言わんぞ」

冷たく吐き捨ててやると、

「むうっ！」

なんて、ひなたは如何にも不満そうな声を上げて、

「起陽のばかつ！　こうなったら、起陽のことも可愛くしてやるんだからっ！」

言つや、鞆から猫耳をもう一つ取り出した。

……それをどうするのかなんて、考えなくたって分かる。抵抗したって無駄だつてことも。と言うか、抵抗する気も起きないのだがめんどくさくて。

「よし！　ほーら、可愛くなつたっ！」

どうだと言わんばかりの表情で、ひなたは言い放つ。

俺の頭上には、ひなたとは色違いの猫耳。

……まあ、取り敢えずは満足してくれたらしい。

嘆息しつつ猫耳をむしり取ると、俺は改めた。

「ガッコの中庭にさ……小さい花壇があつてよ。香月センセに呼び出されてさ。園芸部員の奴と、その花壇の世話をさせられてた」

若干嘘ではあつたが、ひなたに疑う様子はなかった。

「ああ、あそこ！　あの花壇、小さいけど、凄く綺麗なんだよね。

花の種類も結構多くて、ラベンダーとかのハーブ系もあつたりして園芸部のヒトが世話してたんだ、へえ」

「何だ、案外有名なのか？」

すぐに思い当たった様子に、少しだけ驚いた。よほど良く気の付く奴でなければ、あんな中庭の片隅にある小さな花壇、知らなくても不思議ではないのだが。

「有名かどうかは知らないけど、あたしは、いつもどんなヒトが育ててるのかな」って、ちよつと気になってたから」

なるほど。単にこいつが目敏い女だつたつてだけの話か。

「でも、残念だよな」

ふいに、ひなたは言った。

「あの花壇も、もう見られなくなっちゃうなんて」

「どう言う意味だ」

ひなたの不穏な物言いに、少しだけ、声が低くなっていたかも知れない。

驚いたように眼を丸くして、ひなたは言った。

「えっ？　だって、中庭のあの辺り、野球部が春の大会で優勝した記念碑を建てるから、もう今月の終わりには整地しちゃうって……知らないかったの？」

それはまるで、たちの悪い冗談のような話だった。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「2 - 4」

別に、さほど肩入れしているつもりはなかったんだ。

元々、横暴な教師に無理矢理呼び出されてのことだ。花壇にも、園芸部にも、何の思い入れもなかった。

逢花にだって。

出会っていなれば、何も知らなければ、俺は今頃呑気に惰眠を貪って、望み通りの日々を送っていただろう。

……だけど、もうだめだ。だって俺は知ってしまった。小さくとも美しい花壇の存在を。出会ってしまった。小さくとも、何より美しい花を。

肩入れなどしていない、と。……そう嘯いたところで、俺は今、こんなところにいる。

「境守？」

少し驚いたような声が、背後から聞こえた。

俺はささやかな花壇を眺めるのを止めて、振り返る。

そこには、予想通りの少女の姿。

「……よう、逢花。遅かったな」

言っただけで、逢花は慌てたようにぱたぱたと駆け寄って来て、二日の間にすっかり慣れてしまった距離で、俺の顔を見上げた。

「何が遅いものか！ まだ八時前だぞ！ 授業もないのに、お前が来る時間ではないだろ とゆーか、まさか今日も来てくれるなんて思わなかった。だからこそ、気まぐれでこんな早い時間に来たと言っただけ……。もし私が遅く来ていたら、それまで待つつもりだったのか？」

「ああ。……どうせ暇だからな」

すでに二時間待っていたとは言えなかった。

逢花は、どこか複雑そうに苦笑して、

「……呆れた奴だ。そんな熱心に通い詰めても、良いことなど何もないぞ。精々、みすばらしい花壇と可愛げのない女が見られるくらいだ」

嘆息混じりのそんな言葉。

「何だ、やっぱり俺なんかが来ても嬉しくないのか」

少しばかり拗ねたように言ってみると、

「ばか、そんなの 嬉しいに、決まってるだろう」

赤い顔を背けるようにして、逢花はそう言った。

逢花のそんな素振りには微笑ましくて、思わず笑ってしまいそうだった。……むしろ、そうするべきだったのかも知れない。

けれど、聞かなければならなかった。それが、今日ここに来た理由だったから。

「花壇……なくなるって、本当か？」

花の世話を始めた小さな背中に、そう尋ねた。

ぴくり、と、僅かに背中が強張ったような気がした。

「……ばれてしまったか。いやさ、知らぬ方がおかしいか。何事に於いてもパツとしないウチの学校にとって、期待の星だからな、今年の野球部は」

どこか諦観したような笑みを含んだ言葉。

「本当なのか」

改めて問うた。部活動どころか、学校生活そのものに興味のない俺にとって、野球部の功績など何の現実感もなかったから。

「本当も本当さ。もう一週間もしないうちに、この場所は更地になる。もう来月の頭には、立派な記念碑が設置されるらしい。夏の大会前に、景気づけと言っかな、背中を押しておきたいんだろっとな、

学校も」

「ははは、と逢花は笑う。そこにどんな感情があるのかなんて分らなかった。

だから、問うた。問うても、意味のないことなのは分かっていたのに。

「……いいのかよ、それで」

「……どうにも、なるまいよ」

逢花は、小さく嘆息した。

「学校が決めたことだ。私一人が騒いだところで何にもならん」

「一人って……香月センセとか、他の部員とかもいるだろ」

今更と言えば今更な質問を 何故、してしまったのか。

「香月先生はしっかり者だが、まだ若いからな。校内での発言権はそう大きくないのだよ。それに……他の部員などいない。園芸部は、私独りだけだ」

その言葉の意味が、すぐには理解できなかった。

「一人だけ……？」

「そうだ。今時の学生が、わざわざクラブ活動で花を育てたり土いじりをしたりなどするものか。来年、私が卒業した後は、廃部も決まっている。……だから、丁度良いのだよ」

その淡々とした呟きは、余りにも寂しかった。

だから。

「……納得いかねえよ、俺は」

そんな、ガキみたいなことを呟いていた。

それがおかしかったのか、逢花はくすりと笑った。

「お前は我が儘だな、境守。我が儘で ……凄く、優しい男だな」

そう言ったきり、逢花は何も言わなかった。

だから、俺も黙っていた。

「……私はな、境守」

と。やがて根負けしたように口を開いたのは、逢花だった。

「私は……小学校に入学したその日、皆の笑い物になったのだ。理由は簡単だ。母上が見立てた晴れ着だったからな。それも半端無く気合いが入っていた。笑われて当然だ。

……当然だったんだ。けどな、私は、それまで母上の趣味がおかしいなどと思ったことはなかったし 正直に言ってしまえばな、私自身、それを愛していたのだ。……それは、今も変わらない。

ずっと、偽ってきた。私が愛するものは、尊いと思うものは、おかしいのだと。異質なモノなのだ。価値観の共有など望むべきものではないのだと」

そこまで言くと、逢花はふいに立ち上がって、俺を正面から見た。……その瞳が、何かを訴えかけるように潤んでいた。

「お前は、違った」

背筋を伸ばして、逢花は言った。

「お前は、私を可愛いと言ってくれた。私の夢を、笑わないでくれた。私の小さな花壇を、惜しんでくれた。……だから、もういい。もういいんだ……」

そうして。

まだ言い終わりもしないうちに、逢花は俺の胸に顔を押しつけた。背中に回された腕は、まるで宝物を抱える子供のように、きつく、きつく、俺の体を、心を、締め付けていた。

「……お前に、私の花壇を見せることができて……良かった」

くぐもった声が、俺の胸板と彼女の間に漏れる。

俺は、彼女の真意も、自身の心も、何も分からないまま ただ、震える小さな身体を抱えていることしかできなかった。

【^u^u】

《色移ろふは花とヒト》

「3 - 1」

朝から雨が降っていた。

今日はどうするべきか、少しだけ考えて　でも、すぐに出かけるのを止めた。

……むしろ、好都合だと思ったのかも知れない。晴れていれどうしても気になってしまいが、雨であれば、顔を出さずとも不自然ではないだろう。

正直、どんな顔をして彼女に会えばいいのか分からなかった。彼女の吐露した言葉と、俺の体を締め付けた、彼女の腕の感触が今も俺の中をぐるぐると回り続けていたから。

考えなければならぬことはあった。何とかしなければならぬことはあった。けれど、俺に『花壇を見せられて良かった』と呟いた彼女の優しくも哀しい声が、俺のココロを千々に乱した。

ろくに考えも纏まらないまま、助けを求めるように　俺は今日も、あのヒトのいる、この場所にいます。

「どーしたの？　おにーちゃん」
ふいに声をかけられて、はっとした。

見れば、あぐらをかいた俺の上に座った女兒が、きょとんとした顔で俺を見上げています。

「あ……ああ、いや、何でもないんだ」
慌てて答えると、女兒は不思議そうな顔をしながらも、

「そーお？」

そう言つて、再び小さな手に持った二本の鉤針を動かし始めた。取り敢えずは、余計な心配をかけずには済んだらしい。だが
「なーに？　いい若いもんがため息なんかついちゃって。ため息つ

くと幸せが逃げるって、知らないの？」

「やれやれとため息をつく俺に、そんな声。顔を上げれば、優しい苦笑を浮かべた見知った顔が、俺を見ていた。手には、女兒と同じく、二本の鉤針が握られている。」

「……ああ、そう言えば、そうだったか。やはり俺はどうかしている。完全に上の空どころか、このヒトの顔を見るまで、自分がいる場所もいる理由も朧だった。」

病院だ。度々折り紙教室が開かれることで、近頃認知度を上げている、小児科病棟のレクリエーションルーム。絨毯敷きの一角に、俺達三人はいる。

今は、編み物教室の真っ最中だった。いつもは、主に女兒を中心に何人かの生徒の姿があるが、今日は一人だけ。他でもなく、今も俺の膝の上で、当たり前のようにくつろぐその子のことだ。

名前は、大岩^{おおいわ} 遙花^{はるか}と言う。実に優秀な生徒で、齡八つにして師匠をも唸らせる腕前の持ち主である。とは言え、一年以上に渡る長期入院の間、ずっと師匠に付きつきりであったのだから、それも当然であったのかも知れないが。

見ての通り、何故か俺はこの子に好かれている。子供に好かれることなど、俺の人生に於いてはまずないと思っていたし、事実、これまでではそうであったのだが。しかし、この病院に通うようになってから、結構ガキ連中とも上手くやっているような気はする。

こうして感じる幼い温もりを、悪くないとも思っていた。

で。その師匠に当たるのが眼の前の彼女 緋蔭優さんであるわけだ。

「何か悩んでるでしょ。おねーさんに言ってみ？」

いつもの調子で、少し戯けたように言う優さん。

「……いや、何でもねえよ」

俺は首を振った。

だが、

「たつくんのうそつきー」

そんな言葉に一蹴された。

「たつくんが何か悩んでるのなんて、おねーさんお見通しなんだから。はるるんも言ってるやんなさい、うそつきーって」

そんな悪魔の囁きに、純朴な少女は俺を見上げて、

「おにーちゃん、うそつきなの？」

なんて。……そんな綺麗な眼で俺を見ないで欲しい。

優さんは優さんで、

「そーよー、もうほんと、すっごいうそつき。ひねくれ者のあまのじゃくで、ほんとどーしよーもないんだからこの子はっ」

良からぬことを吹き込んでくれるし。……まあ、間違っちゃいないのは自覚してる。

答えに窮して黙っていると、やがて遥花は満面の笑みで言った。

「うそつきー」

うつつ……その通りだよちくしょー。

「観念した？」

勝ち誇ったように言う優さんに、俺は嘆息した。

「……はいはい、観念しましたよ。……けど、話したところでどうにかなることじゃないと思うぜ？」

俺は言ったが、優さんの笑顔が陰ることはなかった。

「それでも、話してみなくちゃ何も分からないでしょ？ 自分ではどうにもならないと思っていても、ヒトに話すことで意外と良い方向に向かうことだってあるんだから」

「……それでもどうにもならなかったら？」

……質問は、我ながら悲観的だな、と思った。けれど、それでも優さんの笑顔は変わらなかった。

「それでもどうにもならなかったら 後は、足掻くしかないね。」

足掻くだけ足掻けば、例え望んだ形にはなくても、何も結果が出せなくても……きっと最後は、笑顔でいられると思うから」

その言葉の不思議な重みに、俺もまた、自然と笑みをこぼしていた。

……そうして、語った。小さな花壇と、小さな少女と、大きな夢の話。

【つつく】

《色移ろふは花とヒト》

「3 - 2」

雨は、その日の夕方にはもう上がっていた。翌日は、前日が嘘のような良い天気で、花壇の手入れをするには持つて来いの陽気だった。

そんな陽気とは裏腹に、俺のココロに掛かる雲は未だ晴れてはいなかったが、それでも、会えば何かが分かるだろう……。と。優さんは、そう言った。今一番してはならないのは、彼女を避けることなのだ、と。俺は、彼女の側にいるべきなのだ。今は。

……だから、俺はまた、小さな花壇と小さな少女が待つ、この場所へとやってきた。

だが、今日のその場所は、これまでと少しだけ様子が違っていた。

花壇があり、逢花がいる。それは変わらない。けれど今日は、それ以外に数人の生徒の姿が見えた。

男子生徒が三人。逢花と正面から対峙するように立っている。

逢花はと言えば、その三人の前に立ちはだかるように仁王立ちだ。表情は、俺に見せるのとはまるで違う強張ったもので、まるで、目の前の三人から背後の花壇を守ろうとしているかのように見えた。

遠目で状況はよく分からなかったが、それでも、俺が遠慮する理由はなかった。むしろ、急いで逢花の元に駆けつけなければならぬような焦燥を感じていた。

焦燥に背を押され、俺は歩みを進める。近づくにつれ、彼らのやり取りが聞こえてきた。

「からよ、どうせもうすぐ潰すんだろ」

「それがどうした！ お前達に関係ないだろう！」

予想通りと言うべきか。逢花の言葉は、会話と呼ぶには余りにも荒々しいものだった。

……？

ふと。不思議な感覚が過ぎる。脳裏を掠めるふとした違和感。……これは何だ？

だが、四人の口論は、俺の疑問の解決を待つてはくれなかった。

「関係ねえ？ んなわけねえだろ、俺達や、一応野球部だ」

「そうぞ。ここにや、俺達の輝かしい功績を称える記念碑が建つんだから」

「それとこれとは話が別だ！ 工事までにはまだ日がある！ それまでこの場所は、園芸部の 私の管理下だ！ 勝手なことは許さない！」

「何が園芸部だ、テメー独りしかいねえくせに、いきがってんじゃねーよ」

「つーか、女のくせに生意気なんだよテメーは」

「もういいわ。オメーが何と言おうが関係ねーし。お前ら、こいつ抑えてろよ。こんなウゼー花壇、俺がぶっ潰してやつからよ」

一人が合図すると、他の二人の男子生徒はニヤリと笑って、逢花の細い両腕を掴み上げた。

「……！ 何をするっ！ 放せ！ やめろっ！」

苦痛に喘ぎながら、それでも気丈な言葉を発する逢花。

だがそれを無視して、男子生徒は嫌な笑いを浮かべたまま逢花の花壇に近づいて行く。

俺は。

「ぐえっ！？」

挽きつぶされた蛙のような声を出して、そいつは地面に転がった。

他でもない。俺が、後ろからシャツの襟元に手を引っかけて、そのまま引き倒してやったから。二、三個、ボタンが良い音を立てて弾け飛んだのが見えた。

「なっ……！？」

「て、テメーは……！」

口々に、意外性のない反応を返してくれる。俺はさして何の感情も抱かないまま、逢花の手を掴み上げる二人を暗い眼で見た。

「放せ」

俺の発したその言葉を、奴らは理解できなかったらしい。だから、繰り返した。

「……それから、その汚え手を放せって言ってた。そいつは、お前らみたいなド汚えクズが軽々しく触れていい女じゃねえんだよ」
そこまで言うのと、そいつらはようやく人語を理解したのか、怯えたように逢花を解放し、地面に尻餅を突いて咳き込んでいる仲間の元へと後退った。

俺は敢えて何も言わなかったが、解放された逢花はすぐに俺の背後に身を隠すと、不安を誤魔化すように俺のシャツを握った。

「っ……げぼっ……さ、境守っ……てめっ……！」

痛む喉を押さえながら、それでも悪態をつく男子生徒。俺はそれを冷たい眼で見据えながら、吐き捨てた。

「何か文句があるのか？」

すると、他の二人は耳打ちするように言った。

「おい、大会前にやばいって……！」

「それに境守は、あいつはやべーよ……！」

そんな言葉に、尻餅を突く男子生徒も、渋々ながら文句を取り下げた。仲間に支えられながら立ち上がると、

「っ……境守っ！ てめーあんま調子に乗ってんじゃねーぞっ……！」

そんな捨て台詞を遺して、仲間共々、慌ただしくその場を後にした。

……雑音が消え、俺達の中庭は、いつもの優しい静けさを取り戻す。

逢花は、握った俺のシャツを放すこともなく、そつと額を俺の背に押しつけた。

「すまない境守……助かった　面倒ばかり……かけているな、私は……」

その声が、まるで泣いているように聞こえたから。

「……何なんだ、あいつらは」

自らの胸中に湧き起こる邪な欲求を誤魔化したくて、そんなつまらないことを尋ねていた。

逢花は、疲れたような息をついて言った。

「……野球部の三年さ。と言っても、奴らは補欠だな。……奴らも部活で登校していたのだろうが……ニアミスしてな。因縁をつけられた。その……昔、ちと揉めたことがあったのでな、根に持っていたのだろう」

揉めごとの理由など分からなかったし、問うても意味のないことだと思った。だから、

「……そうか」

そう言っただけ、俺は口を噤んだ。言すべきことが、見つからなかった。

「……境守は」

どれほど沈黙が続いた頃か。やがて、逢花は呟くように言った。

「境守は、優しくなったな。……いや、違うか。お前は元々優しい奴だ、それを覆い隠していたトゲが取れたと言うのか　荒々しさが、和らいだ気がする。……前のお前だったら、あの三人は今頃病

院送りだつたらう」

そこまで言うと、逢花は少だけ意地悪く、くくつと笑った。けれど、それも長くは続かず、すぐに声の調子を落として続けた。「……行動だけじゃない。表情も、柔らかくなつた。……希にだが、優しい顔で笑うようになった。そんなお前を遠目にでも見られて、私は嬉しかった。

……嬉しかった、けれど。……それ以上に、悔しかった。できるなら、お前に笑顔を取り戻させる役は……私が、負いたかつたのだ。いや」

ふと、俺のシャツを掴む逢花の手に、力が込められたような気がした。

「それは、高望みしすぎと言つものか。ずっと声もかけられずにいた、自分が悪いのだから……自業自得だ。

……そうだな。私は、もうこれで満足するべきなんだ。今、この瞬間、境守が側にいてくれる。温もりを感じさせてくれる。

……それだけで。私は、もう、満足だ……」

逢花の言葉の意味が、俺にはよく分からなかつた。ただ、ぽつりぽつりと雨の雫のように呟かれるその言葉は、俺のココロの中に少しずつ染み込んでいく。まるで、そこに小さな若葉を芽吹かせようとするかのように。

けれど、若葉が芽吹くことはなく、芽吹いたのは、一つの疑問だけ。

彼女は、俺が変わつたと言つた。それは今の俺と いつの俺を比べてのことなのか。

彼女は、いつから、俺を知っている？

……答えは見つからなかつた。

今は、
まだ。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「3 - 3」

入学してまだ間もない頃、俺は当時の最上級生を殴り倒したことがある。白昼に、校内で。公衆の面前で、だ。

と言っても、俺からいきなり襲いかかったわけじゃない。

……理由は、何であつたか。因縁をつけられたのは間違いない。何か、とんでもなく鬱陶しい理由で絡まれたのだ。とんでもなく鬱陶しくて 許せない理由で。

こいつらやったの、テメーか？

確か、そんな台詞だった気がする。

……こいつら？

そうだ。確かあの時、あの男以外に誰かがいた。……三人。

三人だ。一つ上の上級生が三人。……三人？ その人数には覚えがある気がする。

とどのつまり、報復か。正直顔など覚えていなかったが、俺が、その三人を殴り倒したことがあつたのだろう。

だが、当時の俺には意味が分からなかったし、顔にも見覚えがなかったから、「知らねーよ」って、そう言つたんだ。

そうしたら、奴はどうしたっけ。

……そうだ、確かこう言つた。

中庭で、こいつらやつたんだろ？

中庭で。……言われてみれば、覚えがないわけではなかった。

俺は、ヒトと群れるのが好きではない。集団行動と言う名の一括管理を強いられる学校生活に於いては、できうる限り独りになれる時間、場所を模索して生きている。

あの時も、入学したばかりで勝手の分からない校内を、独りになれる場所を求めて歩き回っていたのだ。

その途上で、その場所に通じなかった。

校舎の壁に囲まれた、小さな中庭。全くないわけではないが、それでも日当たりの少ない暗い場所。人影もほとんどなく、オブジェ的な何かが設置されているわけでもない。物寂しい、忘れられた場所だった。

一見、俺が棲むに相応しくも見えたが、だめだ。無人と言う訳じゃない。それに、これではまだ明るすぎる。草木も生えない場所であれば、俺には似合わない。

そこに在る僅かな人影を一瞥して、俺は踵を返そうとした。

だが。……何の気まぐれか、俺は足を止めてしまった。

声が、聞こえたから。

荒々しい声のやり取り。明らかな口論だ。こんな静かない場所で何を。……いや、昔から、馬鹿共が悪さするのは、静かで人気のない場所と相場が決まっているか。

呆れながらも、しかし、俺は立ち去ることができなかった。理由は 何だったか。

中庭に足を踏み入れると、程なくして、口論の内容が耳に入ってきた。

だからっ、ボール取るだけだって言ってるだろーがっ！

不快な声だ。相手と理解し合う気など欠片ほども感じさせない、自分本位で身勝手な声。

そんなことを言って、また私の花壇を踏みつける気なんだろう！

気丈な声が、不快な声を迎え撃つ。

そうだ。立ち去れなかったのは、その気丈な声のせいだ。

はあ？ 何言ってんだこの女、そんなん知らねーし。

嘘をつくな！ 花壇に残った靴跡を何度も見ているのだ、私は
っ！

口論は続く。俺には、どちらの言い分が正しいのかなんて分から
なかったし、そもそも詳しい事情も分からなかった。

……だが。その不快な声が、余りにも耳障りだったから。

気がついた時には、右手に鈍い痺れが走っていた。……ヒトを打
倒した時の、胸の悪くなるじんじんとした鈍痛。

何かを問うわけでもなく、誰かを想うわけでもなく、ふいに振る
われた暴力。それに、彼らはどんな感情を抱いたのだろう。大した
抵抗も言葉もなく、怯えたように、奴らはその寂しくも優しい場所
から立ち去った。

……何をやっているんだろうな、と自嘲的に思った。こんなこと
をしたって、誰が得するわけでもない。誰かが喜ぶわけでもない

無論、俺自身も。

別に、何か思惑があつたわけでもないし、誰かを喜ばせたかつた
わけでもないのだ。……だから、そいつの姿も、当時の俺の眼には
映っていなかったのかも知れない。

でも、意識していなかっただけで、そいつは、その時も、そこに
いたのだ。

小さな花壇を守る、小さな少女は。

「　そう言う……　ことかよ……」

悪態をつきながら、俺は寢床から身を起こした。全身が汗でびっしりと濡れている。

カーテンの隙間からは、熱を運ぶ真夏の朝日が差し込んでいた。

「っ……　一年以上も前のこと……　覚えてられるわけ……　ねえだろが……」

一年以上も前のこと。そんなの、夢でもなければ、思い出すことなんて出来やしなかった。

「……　一年以上も」

そう、一年以上も。

「俺の馬鹿げた気まぐれなんて……　覚えてんなよ、馬鹿が……」

……　ほんとに、馬鹿げてる。何の得もないことで拳を痛めた俺もそれをいつまでも覚えている、あいつも。

だけど、悪態をつきながらも、俺は自らの顔を覆った両手を外せないでいた。だって、その顔は余りにも無様だったから。鏡を見なくたって分かる。けして世間様に晒せない顔をしているのだ、俺は。顔は晒せない。晒せるわけがなかった。

こんな無様な　　涙だけは。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「3 - 4」

俺は……無力だ。金もなければ、社会的な力も、何も持ち得ていない。

何より、ガキだ。自分で自分が嫌になるくらい、俺はガキなんだ。どうにもならないことに喚き散らし、腕を振り回すことしかできない、我が儘で格好悪いただのガキ。

……だから。俺が、誰かにしてやれることなんて何もない。……そんなこと、嫌と言うほど思い知らされている。

それは仕方のないことなんだろう。誰も 逢花も、優さんも、俺に何かを求めたりなんかしない。無力な俺を、責めたりはしない。つまりは、そう言うことなのだ。

それは、彼女たちの優しさなのだろう。事実、許されることの安らぎを、俺は感じている。それ以上に耐え難い歯痒さを感じたとしても、それは事実なのだ。

結局の所、俺みたいなガキは、その歯痒い安らぎに身を任せるしかないのだ。それ以外には何もできないし、無理をすれば、無茶をすれば、空回りして、全てを、大切なモノ全てを、無惨にぶちこわしてしまうだけなのだ。

今は、その子の傍に居てあげて。たつくんが居てあげなきゃ、だめだよ。

そう言った、優さんの言葉がよみがえる。

そうなのだ。俺には、それしかできることなどない。彼女を救ってやろうだなんて……鳥澁がましいことを考えてはだめなのだ。

そもそも、俺が特別やらなきゃならないことなんてなかった。花壇が無くなると言っても、そこにある花までも無くなるわけじゃない。工事が始まる前までに、然るべき場所に植え替えれば良いだけのこと。

幸い、逢花の家はその筋の専門家だ。素人の俺が危惧すべきことなど何もない。

……その、はずだったんだ。

俺の感じていた不安は、あくまでも子供染みた無力感故のものであって、何もそんなことを予測していた訳じゃない。……けれど、もしかしたら、こんなことが起こることをこそ、俺は危惧していたのか。

俺が、もう幾度目かの訪問をした朝。

そこに、色取り取りに咲き誇る花々の姿はなかった。

あったのは、無惨に斃れる花々と、踏み荒らされた花壇の姿。

何があったのかわんて、考えるまでもなかった。誰の仕業であるのかだつて。

身体の中の血が全て熱湯になった様な感覚を覚える。それは、怒り、憎悪 殺意。

けれど、それすらも凌駕するやり切れなさがココロを締め付ける。傍らに転がった、手提げ袋を見てしまったから。ここ数日で、すっかり見慣れたものだ。いつも、彼女はこれを片手に通っていたのだ。大切な花たちのために。

この惨状を目の当たりにして、彼女はどんな感情を抱いたのか。

……そんなもの、俺如きには分からない。分かるなどと、軽々しく言うてはならない。

それでも、胸をきつく締め付ける、どす黒い吐き気のようなものを俺は感じていた。吐き出すことのできない黒い固まりが、胸の奥につかえているのだ。

……いいや。吐き出すことは、できる。彼女には無理でも、俺にはできる。きつと、多分、それは俺にしかできないこと。俺が唯一できること。……いつかと同じ答え。

だが。俺の足は動かない。すぐにでも駆け出してしまいそうなほど、全身の血は煮えたぎっているというのに。ようやく与えられた役目だというのに。

俺が今、すべきことは何か？ できることは何か？

自問して、自問して。

俺は、彼女の手提げ袋を拾い上げる。

軽く埃を払ってやって ……俺は、花壇に背を向けた。

向かう先に怒りはない。憎悪も、殺意もない。

今は、その子の傍に居てあげて。たっくんが居てあげなきゃ、だめだよ。

胸に湧くのは、ただ、その言葉。

【つつく】

《色移ろふは花とヒト》

「4 - 1」

母親つてのは、こと子供のことに關して、時々、変な能力を發揮することがある。

それは逢花の母も然りで、彼女は突然現れた俺にも動じることとはなかった。まるで全てを承知していたかのように優しく笑って、俺を招き入れてくれた。

そんな母の優しさに、ある種の安らぎを感じたが 同時に、それだけでもう、逢花の奴がどんな様子で帰宅したのかが容易に想像できた。

果たして、初めにどんな言葉をかけるべきなのか。

……そんなことも分からないまま、俺は、逢花の部屋の前に立っていた。

「……逢花？ 俺 境守、だけど……」

控えめにノックをして、恐る恐る声をかけた。

返事はない。だが、微かに身じろぎするような気配だけは感じられた。

「……すまん、入るぞ」

迷いがなかったわけではないが、ただ突っ立っている訳にもいかず、俺は扉に手をかける。拒絶の声はなかった。

そこは、一見、女性らしさを全て排除したかのような簡素な部屋だった。けれど、良く眼を凝らして見れば、そこかしこに、まるで人目を避けるかのように可愛らしい調度が隠れている。

それは、彼女の精神世界そのものだった。

何よりも愛しいと想うモノがありながら、されど、けしてそれで

世界を埋めることのできない矛盾。不条理な抑圧と無限の孤独に苛まれる、悲しみの場所。

……その中心に、震える小さな背中が蹲っていた。

「……逢花」

名を呼んでみたが、相変わらず返事はなかった。

俺はしばし思案して　けど、すぐに嘆息した。うじうじ悩むならんざ俺らしくねえ。答えねえなら、ためー勝手に喋ってやらあ。

「ほらよ、落としモンだぜ。ったく、こんなデカくて目立つモン、落としていくなよな」

言って、逢花の傍らにそつと手提げ袋を置いた。

と、逢花はちらりとそれを見やって、言った。

「……そつか。わざわざ、こんな物を届けるために、すまなかったな」

静かな声だった。敢えて感情を押し殺しているような声。

そこに、どんな想いが込められていたのかなんて、俺には分からなかった。

だから、敢えて戯けるように言った。

「まさか。俺だって、そこまで物好きじゃねえさ」

逢花の背中が、少しだけ怪訝そうに揺れた。

「……じゃあ、何のために？」

そう問った逢花に、俺は苦笑混じりに言った。

「……ガキが、泣いてると思ったからさ。俺も最近気づいたんだけどな。どうやら俺は、ガキが泣いてるのを見ると、無理矢理にでも黙らせてやらないと気が済まないタチらしい」

そんな言葉に、逢花は僅かにくすりと笑って、

「誰がガキか……失礼な奴だ」

そつ、穏やかな声で言った。

しかし、その穏やかな声とは裏腹に、逢花はこちらに顔を向けようとはしなかった。

「……心配は無用だ。この通り、私は泣いてなどいない。少々ショックだったのは確かだがな、これしきのこと、耐えられぬほど弱くはないさ」

そんなことを言う。強がりなのは、顔を見なくなっただけで分かった。

「あんな。そんな強い奴が、お気に入りの手提げ袋落としたまんま、部屋で独り膝抱えてたりするかよ」

「大丈夫だと言っている」

嘆息混じりの俺の言葉に、逢花は声を固くして言った。

「……言っただろう。私はもう、満足なんだ。お前に花壇を見せてやることができた時点で、私とお前の関係は終わっている。それで終わりなんだ。……それ以上、何を望めと言うのか」

そんな自己簡潔の呟きに、俺は半ば苛立ちを覚えて、逢花の肩に手をやった。

「っ……！？ やめろっ……！」

拒絶の声。けれど、俺はもう止まらない。

「はあ？ 何言ってるんだ、ヒトと話す時や、相手の顔見るモンだから。いいからっ……こっち向けてのっ！」

強引に、その華奢な肩を引き寄せた。

「ひああっ……！？」

言葉にならない悲鳴。同時に、その軽い身体はいとも容易く地の戒めから解き放たれて、そのまま俺の胸元へと倒れ込んだ。

ぽすっ、と言う軽い音がして 俺を見上げる形になった彼女と、眼があった。

驚きで、まん丸に見開かれた大きな瞳。けれど、大きさよりも印象深かったのは、それが酷く濡れていたこと。そして、誤魔化しよのない、頬に描かれた軌跡。

「……ほれ見る。やっぱ泣いてんじゃねーか」

先ほどまでの強がり思い出して、思わず苦笑してしまった。

そんな俺の顔を見て、逢花がどう思ったのなんて分からない。分かったのは、彼女の強がりもそこまでだったと言うこと。

「っ……境守いつ……！」

言うや、逢花は瞬間、身体の向きを変えて、そのまま俺の首根っこにしがみついた。

ふいなことに、俺はバランスを崩して背中から倒れ込む。

だが、そんなことにもお構いなしに、逢花は俺に覆い被さったまま、

「境守っ、境守っ、さかがみいつ……！」

そう、悲痛な声で俺の名を呼び続けた。まるで、幼少から今までずっと我慢してきたモノ全てを吐き出すかのよう。

俺は、そんな少女の叫びを、ただじつと聞いていた。言うべきことなど見つからなかったし 何より、今はそうしてやることを、彼女も望んでいるような気がしたから。

【つつく】

《色移ろふは花とヒト》

「4 - 2」

泣いてる女ってな、見ていて気分のいいもんじゃない。それが肉親や、それに近い相手だったりすると、それこそ堪ったもんじゃねえ。その上、原因が自分にあったりした日には 考えたくもないな。

……まあ、そのいずれでなくても、嫌なもんは嫌なんだが。女の泣ってのは、さ。

無遠慮に俺の胸に乗ったそいつが泣き止むのに、どれだけの時間が掛かったのか、正確な時間は分からない。ただ、俺の胸にけして小さくはない染みが出るのには十分な時間だった。

「……落ち着いたかよ？」

嗚咽が聞こえなくなったのを確認して、俺は嘆息混じりに問うた。逢花は気恥ずかしいのか、声は出さず、僅かに身じろぎしただけだった。

「……この状態じゃ、頷いたって分かんねーよ？」

分かっていながら、意地悪く言う俺。

「……分かってるくせに、そーゆーことゆうな」

逢花は拗ねたように言っつて、けれど、やはり俺の胸から身を起こそうとはしなかった。

潔く諦めて、俺は嘆息した。

そうして、改める。

「……なあ逢花。一つ、聞いていいか？」

「？ ……何だ、改まって」

胸の上の小さな重みが、怪訝そうに軽く揺れた。

拒絶の意図はないと理解して、俺は続けた。

「何で俺なんかに、あの花壇を見せようと思った？」

逢花は少しだけ迷ったように沈黙して、

「……お前に見せたかったから。それでは理由にならないか？」

そんな風に囁いた。

そうか。逢花はまだ、俺が「忘れたまま」だと思っているのか。

「……聞き方が悪かった」

俺はじつと天井を見つめたまま、改めて告げた。

「花壇を見せるだけなら、今まで幾らでも時間はあつたろ。こんな切羽詰まった時期でなくても　それこそ、丸一年。……お前と俺が出会ってからの、一年」

「……覚えていたのか」

喜んでいいのか、困っているのか、分からないような複雑そうな声だった。……あるいは、思い出してほしくなどなかったのか。

「……今だからこそ、さ」

僅かに黙してから、逢花は観念したように告げた。

「こんな切羽詰まった時期だからこそ、私は動くことが出来た。それも、香月先生の助けを借りて、やっとな。そうでなければ……情けない意気地なしの私は、お前の前に立つことすら出来なかった」

……ヒトに否定されることを恐れ、自らを偽り続けた少女。それを、ふと思い出した。

「……………」

かける言葉が見つからない。

けれど、俺の言葉など無用とばかり、逢花は明るい声で続けた。
「それに、これくらいの時間が必要でもあったのさ。私の花壇を、

ちゃんとお前に見せるためには……お前が守ってくれたものを、正しくお前に伝えるためには」

俺が守ったもの。……その儚くも、尊い姿が脳裏に浮かぶ。胸の中の小さな温もりを、何より尊く思う。

しかし、だからこそ、いつまでもその尊さに酔いしれているわけにもいかない。

「……逢花」

華奢な肩を掴み、身を起こすように促す。

彼女は嫌がるように身を固くした。

「……やはり、私ではだめか……？」

子供のようにおびえた声。

「そうじゃ、ないけどな」

口を衝いて出たその言葉が、どれだけ本気だったのかは分からない。ただ確かなのは、彼女を拒絶する気持ちなどは、欠片ほどもなかったと言うこと。

それでも離れるように促したのは

「……さつきから、ドアの外でヒトの気配がするんだよな」

まあ、そう言うことだ。

途端、逢花は弾かれたように俺の胸から身を起こすと、真っ赤な顔で、怒った小動物のようにドアへと向かった。

やがて聞こえてくる、母子の声。取り繕うことなく、感情のままに言葉をぶつけ合える家族。それは、幸福の象徴だ。

そんな光景を背に、俺はやれやれと息をついた。

ひとまず、俺が今ここでやれることはやった。一時とはいえ、この愛すべき親子に笑顔を取り戻すことは出来たのだ。

けれど、これで終わりじゃない。俺がやるべきことはもっと別にある。途中で投げ出したりしてはだめなんだ。

だってそうだろう？ 俺は一度、守ろうとしちまった。男が一度守ろうと決めたのなら、最後まで守り通さなきゃ嘘だ。

俺は、俺の大事なもんを守る。もう間違わない。

あのヒトも、それを望んでいる気がするから。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「4 - 3」

新しい花壇が用意されなかったのは、すでに園芸部の廃部が決まっていたからに他ならない。予期せぬ野球部の活躍で頭の沸いていたうちの校長でなくとも、来期から面倒を見る者が存在しない花壇をわざわざ新たに作ったりはしなかったろう。

だから、それはもう仕方のないことだ。場所があるうとなかろうと、学校には『園芸部の花壇』が作られることはないし、作ることも出来ない。

だから 俺には、そこくらいしか当てがなかったわけで。

「と言うわけで、どうしたらいい？」

「何が『どうしたらいい？』なのか全く分からないけど、何となく分かったよ」

突然切り出した俺に、優さんは揺らがぬ笑みのまま言った。……マジでか。言った俺の方が驚きである。

「……あたしには何が何だか分からないんですけど」

と、俺の背後で渋い顔をするのは、ひなたである。こちらの反応の方がもつともだ。特にこいつは、事情も話さず無理矢理ここまで引っ張ってきたのだから、機嫌が悪くて当然だった。

病院である。加えて言えば、他でもない優さんの病室である。

俺の『当て』とは、つまり、この場所だった。

「って、ほんとに分かったのかよ？」

念のため問い直すと、優さんはこくりと頷いた。

「花壇のことでしょう？ たっくんがこんなに真剣な顔をすること

なんて、今はそれしかないもんね」

何だか見透かされたようで気恥ずかしかったが、今はそれが有り難かった。

しかし、単に意志が通じることと、答えを貰うことはまた別である。

「……具体的に、誰に頭を下げれば許可が貰える？」

俺の発言に、背後で愕然としたような大仰な気配を感じたが、まあ、無理もない。こんな言葉を吐くなんざ、俺自身が一番信じられないんだから。

優さんは優さんで、何が楽しいのだから、ニコニコと笑っている。

「……大丈夫だよ」

優しい声で、優さんは言った。

「ちよつと待つてね」

そうして、おもむろに傍らのナースコールを手に取った。

間もなく、天井のスピーカーからナースの声が聞こえてくる。

《はい、どうされました？》

「草壁さん呼んで下さーいっ」

と。……いきなりナースコールで指名を入れる患者など初めて見たわけだが。

更に言えば

《……はい》

「すぐ来てー」

臆面もなくそんなことを言うてのける奴も初めてだったのだが。

だが、その『草壁サン』とやらは次の瞬間、何も言わずに通話を切った。……姿は見えないのに怒気を感じたのは気のせいだろうか。

……結論から言えば、気のせいではなかった。

「だからっ！ ナースコールを使ってヒトを呼び出すのやめな

さいって言ってるでしょーがっ！ あたし達はあると違って忙しいのよっつ！」

そんな怒声とともに、そのナースは病室に飛び込んできた。この病室が個室であるとは言え、随分とけつたいな看護婦さんである。

一方の優さんと言えば、

「いやーん、怒っちゃやーよー、さっちゃんてばー」
なんて。

見たところ、二人の年はそう変わらないように見える。と言うか、そのやり取りを見るに、年も近ければ、関係も単なるナースと患者のそれではなさそうだった。

「さっちゃん言うなっ！ まったく、あんたって子はっ！ あんまりヒトに迷惑かけるようなら、病院追い出すわよ！？」
てか、
いい加減考え直して出て行きなさい！」

どうやら、かなりお冠のようである。無理もないが。

しかし分らないのは、何故、優さんが彼女をこの場に呼んだのか、だ。

疑問が顔に出ていたのか、優さんは軽く苦笑して、改めた。

「ごめんね、さっちゃん。その話はまた今度　今はそれよりも、
ね？」

促されて、草壁サンは俺の方を見た。

そうして、ふいに合点がいったように笑った。優さんによく似た、無意識にヒトを元気にさせる、明るい笑顔だった。

「キミが境守クンね、優から聞いてるわ。あたしは草壁くさかへ幸子さちこ。よろしくね」

「はあ……」

状況が飲み込めず、気の抜けた返事しか出てこなかった。

だが、次の彼女の言葉で、全てを理解した。

「花壇の件だけど、院長と婦長に話は通しておいたわ。中庭の一角を使ってもいいことになったから。がんばって？」

言って、軽くウインクなどして見せる。

そうか。全ては、優さんがお膳立てしたことなのだ。

俺は。

「……あ　あつ、ありがとう、ごじますつ……！」

無意識に、頭を下げていた。草壁さんと　優さんに。……まっ

たくもって、俺らしくもないが。

ひなたは言わずもがな、さすがに優さんも、少しだけ驚いたようだった。

ともかくも、これで最大の問題は解決した。あと必要なことは、あいつのお袋さんに頼んで必要な物を揃えることと……器具類は、学校から失敬してくればいいか。ことがことだ、香月センセも協力してくれるだろう。

となると、あとは

「……なあ、ひなた」

少し考えてから、俺は背後の幼なじみを振り返った。

状況の飲み込めていないひなたは、眼を丸くしている。

意を決して、俺は告げた。

「俺は……馬鹿だし、ヒトを傷つけるしか能のない、そんな奴だから　……その、さ。お前が……手伝って、くれないか。めんどくせえことに巻き込んで悪いけど……俺一人じゃ、ろくなことできねえって身にしてみてるから　……ひなた。俺を、助けてくれ」

正直、迷いながら必死に紡いだ言葉。歯切れも悪く、何が言いたいのかもよく分からなかったかも知れない。

けれど、ひなたはそんな格好悪い俺を笑いもせず、ただ一度、こくりと頷いてくれた。

どこか嬉しそうに、笑いながら。

【つづく】

《色移ろふは花とヒト》

「4 - 4」

おそらく、勘違いさせてしまっているだろうことは薄々分かって
いた。

本当の自分をさらけ出すことを極度に恐れる彼女が、精一杯の勇
気で着飾ったであろうその衣装。自らが最も愛らしいと思うその装
飾。

それが誰のためであつたのか、分からないほど俺は鈍くない。鈍
くない……つもりだ。

けれど、いざ連れ出されたその場所は、きっと彼女が期待してい
たようなところではなかったらう。

変な期待をさせてしまったのは俺の責任かも知れない。だけど、
内緒にしておきたかったのだ。内緒にしておいたほうが面白い、と
誰かが言ったから。変に誤解を解こうとすれば、ボロを出してしま
いそうで怖かった。

……いや、それも言い訳か。どんな責め苦も後で甘んじて受けよ
う。

だけど、今は。

「……何だ、これは」

最初の言葉は、そんなもの。彼女 逢花は、その場所をじっと
見つめたまま、微動だにしなかった。

彼女の眼の前、すぐ眼下には、煉瓦で囲っただけの粗末な花壇が
あつた。

俺達の作った、花壇。

「花壇に見えね？　いまいち見栄えはよくねーけどさ」

「そういうことを言ってるんじゃないっ」

軽く戯けてみた俺に、逢花は微かに声を荒げた。

「……何でこんなところに、私を連れてきた」

こんなところ、とは、即ち病院である。もちろん、優さんや遙花は現在進行形で入院中であるし、ついでに言えば、ひなたも交えた三人で、今も少し離れたところでことの成り行きを見守っている。

「……俺には、こんなところしか思い浮かばなかったんだ」

逢花の小さな背中が震えてるような気がして、俺は戯けるのをやめた。

「消毒液臭いところは……嫌だったかな」

少し前の自分を思い出しての、その言葉。

だけど、その言葉はどうやら的外れだったらしい。

逢花はふいにくるりと振り返ると、怒ったように唇を真一文字に結んだまま、俺の横を通り過ぎた。

「おっ、おい逢花っ……！？」

慌てて振り返り、呼び止める。

逢花はさして逆らわず足を止めた。

「……わざわざこんな格好をして……馬鹿みたいではないか、私は」
そう、低い声音で漏らす。

……まあ、当然か。危惧していた通りの展開。

勿論、当然なのは、俺が責められることも含めて。ひっぱたかれても仕方ない。女に恥をかかせたのだ、どんな責め苦も受け入れる覚悟は疾うにしている。そう言っただろう？

だけど、背を向けられてしまうのだけは困るのだ。

「誤解させちゃったのは悪かった、それは謝る。なんなら思い切りひっぱたいてくれてもいい。けど、俺もあのまじや治まりがつかない

かったつーか……いや、俺の単なる我が侘つていやそうなんだが

」

「……………」

何とか逢花を引き留めようとする俺。だが、逢花は何も応えない。諦めず、俺は続けた。

「その、お前の気持ちも分かる。けど　あの花壇、俺独りで作ってたわけじゃねえんだ。色んなヒトに迷惑かけて、色んなヒトに助けて貰って……そのヒト達の気持ち、土ん中に入ってる。……ような気がする。」

……あー、何か上手く言えねえけど　あの花壇にだけは、背中向けてほしくないんだ。俺のことはひっぱたいてくれていい。罵ってくれていい。女心の分からないサイテー野郎だっつてくれて構わねえよ。

……二度と顔見せんなつてんなら、そうする。だから　」

「境守」

みつともなく、べらべらと独り続ける俺を、ふいな逢花の声が遮った。

「眼を閉じて齒を食いしばれ」

一も二もなく、その言葉に俺は従った。拒む権利などあるはずもない。

そうして、待った。強烈な一撃がお見舞いされるのを。血へド吐いて齒が5、6本吹っ飛ぶ画まで想像していた。……小柄な女相手にする想像では無かったかも知れないが。

……しかし、俺の頬を打ったのは、そんな憎しみの籠もった一撃ではなかった。

ぺち。音にすればそんな感じ。両頬を挟まれるように、軽い衝撃。眼を開けてみれば、俺の頬に両手を伸ばしながら、こちらをじつと見上げる逢花の顔があった。怒っているのか、悲しんでいるのか

……よく分からない表情だった。

「逢花……？」

戸惑う俺に、逢花は僅かばかり瞳を潤ませて言った。

「お前は、馬鹿だ。……私は、もう、諦めるつもりだったのだぞ。今日、お前とデートして、一日せいいつっぱい楽しんで、それで……もう。なのにこんなことをされては……諦め、きれない。忘れられない……では、ないかつ……」

「おう……か……？」

ふいなことに言葉の意味を計り兼ねた。間抜けに名を呼ぶことしかできない。

そんな俺に、逢花は

「境守の……境守の　ばかつ！」

言うや、またもくるりと俺に背を向けて、しかし今度は、先ほどとは違い脱兎の如く全速力で駆け出した。

「ちよっ、おまっ　おいつ、逢花っ！？」

慌てて声を上げると、逢花は少し離れた場所で振り返った。

「分かってる！　お前の　お前と私の花壇に背を向けるつもりはない！　しかし、そのままではあまりにも寂しいだろう！　家から幾らか見繕ってくる！」

確かに、俺が　俺達が用意したのは、言うなれば入れ物だけだ。逢花の言うことももつともではある。……まあ、実際は、学校から拾ってきたシロツメクサが一輪、申し訳程度に植わっていたりはするのだが。

「それに、土いじりをする格好ではないのでな！　ついでに着替えてくる！　お前はここで、大人しく待っている！　いいか、独りでないなくなったりするのではないぞ！　責任は、しっかり取って貰うからなっ！」

びし！　　つと指を突きつけて言うと、逢花は再び背を向け　　よ
うとして、ふいにまた俺を見た。

きょとんとする俺に、逢花は

「境守の……ばーかっ」

そう言つて、今度こそ、まっすぐに駆けだした。最後に見た顔に
は、真夏のひまわりも真っ青の、満開の笑みが広がっていた。

随分と、俺らしくないことをしてしまったと思う。

街の馬鹿共から、泣く子も黙る境守起陽と恐れられるこのオレサ
マが、何と言う体たらく。『泣く子も笑う境守起陽』では、カッコ
がつかねえもいいとこだ。

後になつてそうばやいたら、今回のきっかけを俺に与えたあのヒ
トは言った。

花もヒトも、時と共に色を変えていくものだから。

自分が今、どんな色になっているのなんて分からなかったし、
この先どんな色になっていくのなんて、それこそ見当もつかねえ
けど、まあ。出来れば少くくらは見られる色になつてくれれば
な、なんて思う。

……ほんと、俺らしくもなかったけど。

色は、時と共に移ろい行く。

それは不確かで、予測不能で、不安ばかりのものだ。

けれど今は、その変化に身を任せてもいい。……身を任せていた
い、と。

心のどこかで、俺はそう思っていた。

【朱色優陽 2 《色移ろつは花とヒト》終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7102m/>

『朱色優陽 アケイロユウヒ 』2

2010年10月8日12時40分発行